

皮膚科 医学史

古文書と暴瀉病 その2

服部 瑛* 服部 友保*

Key words——古文書, 暴瀉病, 県史, 感染分布図

はじめに

『暴瀉病二付』という古文書は実に衝撃的だった。その後、『安政記聞』という古文書の中にもやはり暴瀉病(コレラ)を見つけた。幕末、江戸でも上州でも暴瀉病が蔓延して、その驚きを本誌に「古文書と暴瀉病」¹⁾と題して報告した。しかしそのときの感染分布図は局限していた。当然、全国ではどの程度の惨状があったのだろうか、という疑問が湧いてくる。

何気なく瀬戸内海沿岸に焦点を絞って、愛媛県在住の友人に同県の調査をお願いした。彼はいろいろ検索して、県史の中に暴瀉病を見つけてくれたのである！なるほど、古文書でなくとも、県史を調べることで感染分布がわかるかもしれない。都合の良いことに、地元の群馬県立文書館には42都道府県の県史が陳列されている。早速調べてみることにした。

日本のコレラ

日本におけるコレラは、文政5年が最初である。その後安政5・6年に大流行があったことを前回述べた¹⁾。その3年後の文久2年にも大流行があったとされている²⁾。

今回は、安政5・6年のコレラに関しての話題である。一口に県史といっても編集方針や内容はさまざまで、すべての県が暴瀉病を取り上げているわけでもない。暴瀉病についての記載があったのは、愛媛、広島、大分、福井、三重、静岡、神奈川、

山梨、東京、北海道(順不同)だけだった。それでも貴重な情報を与えてくれる。さらにいくつかの文献^{2~4)}、古文書の情報などを合わせてコレラの感染分布図の作成を試みた。調べてくれた友人に敬意を評して、まず愛媛県からコレラの実態を眺めてみたい。

愛媛県

「安政5年(1858)から万延元年(1860)のコレラは、伊予国でも猖獗をきわめ、多くの死者を出して人々に大きな衝撃を与えた」⁵⁾という。具体的には、大洲領郡中の『塩屋記録』という古文書に、「安政5年9月4日頃ヨリコロリと申病気大流行、直ニ病死也、長崎ヨリ初メ大阪江戸別シテ多シ、当四国ハ高松城下に始まり、一日200人程ゾツ死す、未タ当所ニテハ少々御座候へ共、松山領松前に死人多シ」とあった。どうも四国のコレラは香川県の高松から入り、さらに松山に入っらしい。宇和島藩8月11日付『御手留日記』には、「10日間に死者1,640人、治療中4,500人」とあった。

さらに医師三好周伯の復命書『藍山公記』には、「戸島という所にコレラ患者が出たのは9月5日、罹患者男(23歳)はその夜死亡した。ついで9日2人、10日1人、11日2人、12日4人、13日1人、14日1人」だった。そこで医師の東水が治療にあたった。「15日15人、16日4人、17日2人、18日5人と罹患者は続き、18日2人が死亡した。19日には日夜治療に尽力する東水の長女もコレラと診断された」そして「20日

* Hattori, Akira / Hattori, Tomoyasu 医療法人 はっとり皮膚科医院(〒370-0071 高崎市小八木町2027-4)

5人(内死亡1人)、21日3人と罹患する中で、22日に至り東水も発病、23日には同人娘が薬石効なく死去した。その後、「東水の娘と老女を最後の犠牲にして、24日以後新しい患者は出ず、27日東水が平癒したのをはじめ病人も漸次回復して、10月上旬には戸島のコレラは終息した」とあった。詳細にわたる貴重な記録である。当時、感染が広がっていく中で医師とその娘らもコレラに罹患した。コレラという劇症に対する必死な思いと献身的な療治、悲惨さが伝わってくる。

■ 安政5年と6年の流行

冒頭に述べたように、コレラは安政5年に全国に蔓延したが、それは夏を終えていったん終焉し、そして翌安政6年の夏に再び流行した。愛媛では、安政6年「前年の流行でコレラの恐ろしさを知った人々は疫病除けのまじないをした」のだが、その甲斐もなく「7月からコレラが蔓延」し、「松山城下では2,000余人の死亡者が出た」(『世上見聞録』)。また「9月5日、計73人、10月28日の再調査で死者137人に達した」(『小松藩会所日記』)とあり、「安政6年のコレラは、前年に比べてはるかに多くの古文書に記録されている」という惨状だった。

前回の報告¹⁾で、江戸では安政5年に猖獗を極め、翌安政6年には「稀ニ死るものあり 去年のこくとくにてハなし」(『安政記聞』)とあったので、安政5・6年のコレラの流行は地域によって、1)安政5年が主流のものと、2)安政6年が主流の2つのタイプがあったことになる。

■ 広島県

『広島県史』⁶⁾によると、『広島藩では7月中旬(安政5年)より瀬戸内海沿岸部の港町から流行し始め、やがて領内全域に猛威をふるった。広島城下町では壮健な者がにわかに発病し、「日々死亡人200人或300人ト聞ユ」というありさまであったし、港町であった佐伯郡草津村では、一昼夜ほど大吐瀉して急死するものが多かった』とあった。長崎にコレラが波及したのが5月下旬だから、広島にはおよそ1カ半月後に到達したことがわかる。海路が

コレラの波及に大きな役割を果たしたことは言うまでもない。具体的には、「佐伯郡6カ村のコレラ罹病者は1,659人で、うち死亡161人」という史料が残されていた(『佐伯郡医師会史』)。

コレラの凄まじさは領民を不安のどん底に突き落とした。

■ 幕府の触れ

前回、幕府からの暴瀉病に関する「触れ」が群馬県で5通見つかったと記したが¹⁾、それは関東ばかりでなく広島と愛媛でもまったく同じ「触れ」が存在した。つまりほぼ全国に「触れ」が回達、あるいはその情報が流れていたのである。

「触れ」の大略は、「この病を予防するには体を冷やすことなく、腹部には木綿を巻、大酒や大食いを慎み、消化し難い食物を一切とらぬこと。若しこの病に罹ったら早々に寢床に入って飲食を謹んで暖め、芳香散(桂枝、益智、乾姜の細末を等分に加えたもの)を用いるとよい。吐瀉が甚だしく体が冷えて来たならば、焼酎に龍腦または樟腦を入れ、暖めて木綿に切った布に浸して腹あるいは手足に刷り込み、芥子泥(芥子粉と鰹鮓粉を等分に混ぜたもの)を心窩部ならびに手足に時々貼ること。別法としては、座敷を締め切り木綿の布などに焼酎を浸して何度も体を擦る。あるいは、手足の先や腹部が冷えるところを温鉄や温石を布に包んで湯を使うのもよい」といった見当違いなものであった⁷⁾。

「触れ」を知った民衆は最初大いに喜び安心したことであろう。何しろ、お上からのものだから、その療治は間違いあるまいと思ったはずである。しかしその内容はまったく無効なのだ！ それまでお上は絶対的な存在だったが、このコレラに関する「触れ」の内容は、大いに民衆を失望、落胆させたにちがいない。

■ 九州・山陰

愛媛、香川、広島でのコレラの流行から推定すると、瀬戸内海に面した地域はほぼすべてコレラに感染したと考えられる。『日本疾病史』³⁾には、

「摂泉及備西海東海山陰諸道及沿海諸地、皆有之云、而人怖之、如虎狼、俗稱之、曰虎狼痢(コロリ)」(『印度攪乱考』)とあった。摂は摂州、泉は泉州でいまの大阪、備は備州の岡山県で、西海道は「五畿七道」から考えると九州地方、東海道沿道地域、そして山陰道とあるから、瀬戸内海沿岸ばかりでなく、当然のことだが、九州、山陰地方にも感染が広がっていたことを示している。

■ 大分県

福岡県、大分県、鹿児島県、沖縄県などの九州の県史を調べたのだが、コレラの項目はなかった。わずかに『大分県史』⁸⁾の「中津藩の主な災害・飢饉(享保以後)」という表の中に「安政5年7月コロリ病流行、死者中津町約200人」とごく短く記載されていたことから大分県にもコレラを確認できた。

■ 鹿児島県

古文書『安政記聞』には「薩州候も来府途中(暴瀉病)ニテ卒去被成候趣ニテ実ニ恐怖ノ至二候」と島津斉彬はコレラで死んだと記されている。斉彬の死は、安政5年秋7月だった。井沢元彦氏⁹⁾は、島津斉彬は毒殺されたという見解を主張しているが、残された「坪井芳洲の容態書」を見ると、それは毒殺ではなくコレラの症状に当てはまるので¹⁰⁾、鹿児島県にもコレラが流行したことを示す事実であろう。

■ 京都・大阪

太古の昔から瀬戸内海、そして東海道は最も重要な交通路だった。そのため長崎で発生したコレラは主に瀬戸内海を通過して、大本流が激流のごとく大阪、そして京都まで及んだと考えられる。古文書『安政記聞』には、「大槻俊斎ノ塾より来状ノ写 都下(京都)も八月最初より、六各番町ハ左も無御座候へとも、其地ハ悪症ノコレラアジアチカ流行いたし申候間、全(無)以前も有之候て、邦俗三日コロリと唱候病ニ御座候。一兩日ハ少減し候得共、一日千以上ノ死人ニテ御座候。尤一應悪襲候テハ必死ノ事故、医家療養無益ノ事ニ御座候。尤以前如此悪症無御座候間、諸大家経験且蘭書點

検も未熟のよしニ御座候」とあった。

注意していただきたいのは、京都への波及が8月最初だったとすると、コレラは同じころにはすでに江戸へも波及していた。江戸への急テンポの波及が目される。それとともに暴瀉病は、一方的に西(長崎)から東(江戸)へ同じ経過で波及していくのではなく、地域によっては逆に東から西への波及もみられる。その要因は、交通量かもしれないし、交通手段かもしれない。海路ならば速やかに感染可能となる。

■ 福井県

『福井県史』¹¹⁾を調べてみると、福井でもコレラ騒ぎがあった。「安政6年7月(安政5年ではない)、各地でコレラが大流行した。小浜ではこの流行の噂を聞き町中が大騒ぎとなった。病除けを願って人々は、相次いで丹後大川様に参り、その分祇を借り受けてきて町々で宮を建ててそれを祭った。一方藩では、8月7日、病の流行のため世間が陰気となっているので町内で太鼓などを叩き賑々しくするよう命じた」とあった。小浜の一町人はこの騒ぎをみて、「何と云う事か一向不分、病送りと云う事か、ようき(陽気)に只さわくか、上々被仰出候事故」と不審な目で呆れている。さらに、安政時代の一連の騒動から「諸国之さうどう(騒動)只日本之おとろへ(衰え)天下替わり目か」(『藤田潤治家文書』)と慨嘆させている。

この感染では、北前船と総称される日本海沿岸の感染ルートが重要なのであろう。船は、1)船内で感染を濃密にし、2)確実に伝染させ、3)速やかに各港に運ぶ、という事態を容易に推定させてくれる。

■ 三重県

暴瀉病の感染ルートは、海路ばかりでなく、東海道という陸路にも注目しなければならない。畿内の東に位置する三重県を『三重県史』¹²⁾でみると、「現三重県域では、死者はそれほど多くなく、安政5年8・9月に尾鷲南浦で安房国と紀伊国出身の船乗りが死亡したのが早い記録で、翌安政6年の死

亡人調査では、九木浦(尾鷲市)が10人、須賀利浦(同)が2人、早田浦(同)が1人であった」というに過ぎないのだが、しかし「東海道に近い北の桑名城下町では、死人多しと言う状況であった」ことから、東海道筋あたりは感染が多かった可能性を否定できない。三重県北部は大幹線道路の東海道筋に位置するが、一方、三重県南部への交通は本流から外れていて、結果的にはコレラの感染は少なかったという推定が成り立つのかもしれない。

■ 静岡県

それに対して静岡県は東海道の本流であり、海にも面している。『静岡県史』¹³⁾をみると、明治12年前後に本邦最後の大流行があったことが示されている。安政時代に関しては、大宮町(富士宮市)の酒造家による『袖日記』に、安政5年7月16日「昨日より近在急病人多しと申噂有り」、19日「17日より頃より吉原宿で三日コロリという病気はやる」、21日「吉原辺りで17日以来14、5人の病死者があった」、24日「三島宿に見舞いにいった者が類病をうけて死亡し、流行は大宮町内に及んだ」とあった。コレラの伝播の様子がよく伝わってくる。資料では、沼津で死者500人、三島で400人だった(『静岡県史資料編近世4』)。大切な事実だが、「9月に入る頃、終息に向かった」とあったから、コレラは夏季に集中して、秋に入ると消褪するという特徴を有している。

■ 神奈川県

静岡県の隣の神奈川県にも当然コレラは波及した¹⁴⁾。「コレラが流行しはじめたのは安政5年7月中旬からである。この恐るべき流行病は近畿地方より急速に東に進み、三河・遠江・駿河のあたりはことにひどかったという。それより伊豆を侵し、相武に入った」(『流行風聞書』)。具体的な死亡数は示されていないが、おそらく多大な被害があったと推定される。そしてやはり9月中旬にはその勢いが衰えた。

■ 山梨県

山梨県¹⁵⁾でも同様で、山梨県市川村の名主市川

喜左衛門は、「安政5年7月村内に起こった一件で甲府代官所へ御用のため、甲府横近習町の郷宿に止宿した際、すでに江戸で猖獗を極めていた疫病が、武州八王子辺りへ移り、郡内領(都留郡)を経て甲府の町々で流行の取り沙汰」(『暴瀉病流行日記』)という報に接し、甲府町々にて「1日に3、40人位ツ、死ス」だった。注目されるのは、このときの暴瀉病の流行は南に位置する駿州から甲州を結ぶ交易路からの波及に加えて、東の、逆戻りとも思える江戸からも波及していったのである⁵⁾。ということは、江戸への流行がいかに早かったかを示す事実であろう。

■ 東京

なんとしても猖獗を極めたのは、すでに述べたように、江戸だった。『安政記聞』には「(安政5年)御府内当月(8月)二日頃各ころりト申病流行」とあるから、およそ2カ月余りで長崎から江戸に波及したことになる。長崎5月下旬、駿河、神奈川7月中旬、そして江戸が8月前後で、流行の経過としては辻褄が合う。京都も江戸と同じ8月初めだったことはすでに述べた。

『日本疾病史』³⁾によれば、「安政5年7月27日より9月23日まで、55日間に於いて、江戸中の諸寺院より、各々その取り扱ひたる死亡者を書き上げたもの。浅草の分 15,140人 下谷の分 12,849人 …(中略)…増上寺 1987人 真法寺 672人(33カ所)」とあって「総不残高 268,057人」だった。いままでの古文書の記載をみると曖昧な数字が一人歩きしていたのだが、江戸時代の寺請制度から考えると、一概に否定できない数字となって現れてきた。江戸がおおよそ27万人の死者とすれば、全国でみれば印象として数十万人の人々が死んだのではないかと思えてきた。

■ 秋田県

偶然にも、秋田県公文書館の「研究紀要」の中にコレラの記事を見つけた⁴⁾。「安政五年九月廿一日仙道ニテ此間二夜ニ親子死去致候由御申、コロリと云病之趣」(『山脇弁治日記』)、「安政六年八月

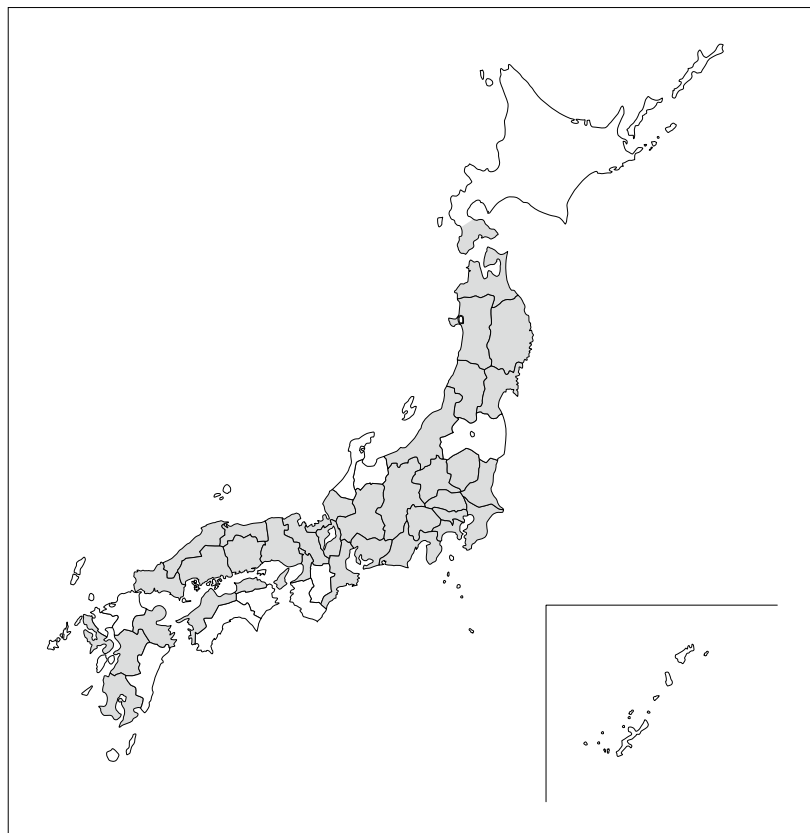


図 確認しえた安政のコレラ感染分布図。程度の差はあれ、おそらく全国に蔓延したと考えられる。

八日 能代と見受候人モアリ(中略)コロリ病流行致し下旬に及、久保田町処々に死人、一兩日連、腹痛にて死スル者数アリ」(『山脇弁治日記』)、「安政六年九月二十三日 大曲辺もコレラ病流行の由来」(『門屋養安日記』)とあったことから、秋田でも安政5年と6年にコレラの流行があった。また、「御国は翌六年の末の月能代より流行出す。(中略)加賀越中の材木積船より伝染して市中に及び、三四十人亡ぶ」(『伊頭園茶話』)ことから、やはり感染は北前船の海路からと考えることができる。9月下旬だから、長崎から4カ月後のことである。コレラは、いままで述べたように夏季集中型だから、秋に入りすぐに衰えたはずである。そして翌安政

6年にまた再燃した。

旅行者(秋田の人)が越後の村上を通ったとき、「此年の越後を通りしに、村上辺夜中高張提灯し連れ老弱大勢金鼓を鳴らし高念仏にて厄神送りす。その音騒々しく夜半までいねかねたり」(『伊頭園日記』)とあった。これは、新潟でも暴瀉病騒ぎがあったことを示している。

北海道

北前船の航路は蝦夷地まで達していたから当然北海道まで感染が及ぶはずである。しかし、『北海道県史』¹⁶⁾には「安政5年7月全国的な大流行をみたコレラは、本道の人士を相当に脅かしたことは当時の手記によって察せられるが、実際の流行はみなかった」とあった。しかし、菊池保男氏の論文

⁴⁾の中に「京都・大阪は八月に發シ且ツ蝦夷及ヒ箱館ハ七月ヨリ始リ、死亡頗ル多シ」(『虎列刺病流行記事』)という記事を見つけた。やはり北海道にもコレラは流行していた。『北海道県史』では暴瀉病の流行は不明と書くべきであった。ある真実が「ない」ということを断言するにはことのほか慎重でなければならない。

■ 感染分布図

以上、安政5・6年の暴瀉病(コレラ)の波及について述べた。それは、安政5年5月下旬アメリカ蒸気船ミッシシッピー号から長崎にもたらされ、速やかに全国に及んだ。いままでに述べた各県県史、コレラに関する論文、さらに古文書などから確定

できた感染地域をプロットしてみると、図のようになる。

図を眺めると、北前船などの航路によって、海岸に接した地域が速やかに感染したと考えられる。一方、内陸でも、各街道の連絡網によって四方に感染が拡大したことは容易に想像できる。その波及は、長崎から京・大阪、東海道筋、江戸の主要ルートが安政5年、その他の地域が安政6年によほど蔓延したように考えている。空白県は、調べた範囲内でその事実が見つからなかったというだけで、おそらく全国に満遍なく波及したのであろう。それほどの大災害だった。江戸での死者がおおよそ27万人という数字が確かならば、全国で数十万人にも及ぶ死亡者があった。途方もない数字である。

■ おわりに

上州の医師上原元伯が熱く語った暴瀉病。それは全国に蔓延、数十万人の死者があった！ しかしこの実態は現在、残念なことだが、歴史上ではあまり注目されていない。ちなみに日本歴史年表・地図¹⁷⁾には「1858 コレラ流行、死者3万」としか記されていない。地震や火事、今回の暴瀉病といった災害は、いかに激甚だったとしても、長い年月では歴史上には残りにくい。しかし、この惨

劇を風化させてはならない。少なくとも幕末のコレラの流行は、現在からは想像もできないほどの激甚な災害で、凄惨さとともに当時の社会に大きな影響を与えたはずである。

註 各県県史、古文書『安政記聞』などは群馬県立文書館に所蔵されているものである。

本稿は、すでに報告した群馬県医師会報837～839号(2018年)の内容を骨子として書き直したものである。調査を手伝ってくれた青木治敬氏(愛媛県松山市)に感謝したい。

<文 献>

- 1) 服部 瑛、服部友保：皮膚病診療 39：330, 2017
- 2) 菊池万雄：人文地理 30：63, 1978
- 3) 富士川游：日本疾病史、東洋文庫133, 平凡社、東京、p224, 1994
- 4) 菊池保男：秋田県公文書館研究紀要 14：1, 2008
- 5) 愛媛県：愛媛県史、社会経済6 社会、p7, 1985
- 6) 広島県：広島県史、近世2, 通史IV, p925, 1984
- 7) 服部 瑛：群馬県医師会報 814：38, 2016
- 8) 大分県：大分県史、近世Ⅲ 大分県、p535, 1985
- 9) 井沢元彦：逆説の日本史、小学館、東京、p99, 2013
- 10) 服部 瑛：歴史研究 650：10, 2017
- 11) 福井県：福井県史、通史編4, 近世2, p918, 1996
- 12) 三重県：三重県史、通史編、近世1, p789, 2017
- 13) 静岡県：静岡県史、別編2, 自然災害誌、p506, 1996
- 14) 神奈川県：神奈川県史、通史編3, 近世(2), p629, 1983
- 15) 山梨県：山梨県史、通史編4, 近世2, p496, 2007
- 16) 北海道：新北海道史、第2巻、通説1, p696, 1970
- 17) 児玉幸多：日本歴史年表・地図、吉川弘文館、東京、p24, 2014